

「戦争と平和！」 第14回

軍国の母

佐野 弘太郎



S14. 9. 23 東京朝日新聞埼玉版

父(父の弟)がノモンハンで戦死したことを報じています。



S14. 9. 23 東京日日新聞武州版

当時59歳だった祖母は、6男1女の子に恵まれましたが、この時学生だった末っ子を除いて、5人の息子を中国戦線に送っておりました。

新聞では、「軍国の母」として戦意高揚のため大きく報道されましたが、祖母の心中を思えば切ないものがあります。

1、2年後、末っ子にも召集令状が来て、父の実家で親戚たちが集まり壮行会が行われました。4、5歳だった私は出征中の父の代わりに出席しました。その時、ふと隣室を見ると脳卒中のため横たわっている祖父のマグロのような大きな体を寝返りを打たせようと小柄な祖母が懸命に押している様子をはっきりと覚えていました。その日が、叔父に会った最後の日でした。

叔父は初めは北支派遣軍にいましたが、後に南方に回され、昭和19年8月29日ニューギニア(カイルー)で戦死しました。22歳、独身でした。

私の手元に2部の古い新聞があります。東京朝日新聞と東京日日新聞夕刊武州版。日付はともに昭和14年9月23日です。記事はともに前月27日に叔

戸籍によれば、8月27日、満州国興安北省「パルシャガル」高地付近の戦闘に於いて戦死、とあります。25歳、独身でした。

当時59歳だ

6男中4、6男が20代前半で戦死。父を含めた兄たち4人も復員はしましたが各々30代、40代、60代で亡くなり、80歳まで生きたのは、関東軍からシベリアに連れて行かれ、極寒の地で重労働に耐え、敗戦後遅くに帰国した5男一人でした。

明治13年生まれ祖母は、6人の息子を立派に育て上げ、全員を兵隊にとられ、2人を戦場で失うという、大日本帝国の平均的な母親の典型だと思います。

明治45年生まれ父は、銀行員でしたが昭和12年身重の母と私を残して、中国へ出征して行きました。6月に妹が生まれましたが、母は心労のため、11月に亡くなってしまいました。

母の死を、戦地の父に伝えることに思い悩んだ祖父(母の父)は父の部隊長あてに手紙を書き父に伝えてもらいました。

父の意思により、葬儀は除隊後に行うこととなり、二階の一室に祭壇が設けられ、母の遺骨が置かれていました。昭和17年、父が除隊となり帰国しました。2月7日の日記には、「5年ぶりに布団にもぐり気分が良い」とあります。

6年後、昭和23年、父は戦地での無理がたたって、病死しました。36歳でした。

祖母、父を含めた叔父たちへの鎮魂の思いを込めてこの一文を草しました。

今後、間違っても、同盟国の始めた戦争に、集団的自衛権行使の名目で、自衛隊が参戦し、戦死者が出て、英霊となって、無言の帰国をし、靖国神社に祭られることがないように、切に願っております。